

平成14年3月(2002年) No. 435

## OMC撮影会は小豆島で企画 5月3日、4日農村歌舞伎をメインに

昨年のOMC撮影会は、柳川さげもん祭りに行き好評でしたが、今年は小豆島の「農村歌舞伎」をメインに、大阪城築城時の石の切り出し場などを取り上げ、一泊二日の撮影会を企画しております。古くから伝わる無形文化財の「小豆島の農村歌舞伎」は、今では数少なくなっており、2カ所になってしまった由で、その一つが、5月3日(祭日)の14時～21時まで行われるそうで、この日時に合わせて計画を進めています。小豆島に詳しい藤原世話役のお世話で旅館や足(バスチャーター)が確保され、ロケハンも含めて、細部をこれから詰めていきます。

詳細が固まりましたら、いずれ会員諸氏の出欠確認の手続きをとりますが、ゴールデンウィークの中で何かとご予定もおありでしょうが、多くの会員さんの参加を期待しています。

■予告：6月例会は第3土曜日15日になります。作家連の映像発表会は、通常阿倍野市民学習センターの講堂を借りて開催していますが、第11回発表会を第3土曜日に予定して申込手続きを行いました。くじ運悪く第4土曜日しか確保出来ませんでした。止むなくOMC例会と入れ替えることとなります。会員諸氏には申し訳ありませんがご了承ほどお願いいたします。

■OVC(大阪ビデオサークル)の発表会は3月31日、難波市民学習センターにて13時より開催されます。OMC所属の方も数名が発表されます。発表会作品を鑑賞するのもいい勉強になります。是非お出かけください。

### 3月例会は第5土曜日30日

——日付変更にご注意を——

3月例会は、会場の都合でいつもより1週間遅れの第5土曜日30日に開催します。お間違えないようにお願いします。撮影会の件などもありますので多くの会員さんのご出席をお待ちしています。作品の方もどしどしお持ち下さい。月1回の楽しい集いにどうぞ。

## 2月作品研究会のレポート

今年は何かテーマがあったときだけ、作品研究会を開催する予定だったが、先月の例会時に開催希望が多かったので、2月例会の前に今年初の作品研究会を開いた。しかし参加者は7名だけで、いつもより少なかったので少々期待はずれ。ところが、参加者全員が作品を持参、出席者7名で作品8本を見て、一本一本時間をかけて研究会らしい雰囲気での勉強の機会となった。

■出席者：有村、河合、合原、西村、増池、前田、安居。

■上映：

1. 出初式：増池氏、4分30秒。1月例会で安居良枝さんが発表された「消防出初式」と同じ日に撮影に行かれたときの記録。こういう人混みの激しいイベント会場での撮影の難しさ、作品の絞り込み方に話題が集まった。イベント終了後の子供たちの遊びをむしろ狙った方が面白かったのではという声もあった。

2. 男と女：安居氏、3分30秒。韮公園での花と彫刻展の像を主役に男の煩惱みたいなものを表現したかったと作者。特殊効果や文字を駆使した力作だったが、果たして作品として成功といえるか議論沸騰。

3. 大木神父とシシュピカスケンドラ（障害児教育施設）：西村氏、7分40秒。ネパール・ポカラで撮られた貴重な記録だが、まだ編集途上の未完成作品。題名のことも含めていろいろ助言や意見が出された。完成が期待される話題の作品になりそう。

4. (改作) 霖雨秋景：河合氏、5分。12月例会で発表した作品の改作で、現場効果音を入れたものと入れないものとの2本が上映された。画面は実に綺麗で申し分ないが、音処理について多くの意見が出された。音、特にSEの活かし方の勉強になった。

5. あれから30年：前田氏、7分53秒。この作品は例会でも上映され、関さんの講評もあるので、詳しくは省くが、面白いお巡りさんの映像のイメージが強すぎるのではないかという意見が出された。少し手を加えたらいい作品になろう。

6. 私が見た動物たち：有村氏、6分30

秒。カナディアンロッキーを旅行されたときの記録映像の中より、鳥や山羊、馬、エルク、黒クマなどの動物を集めて纏められた作品。カナダの大自然には、いろんな動物がいるものだと実感、楽しい作品であった。

7. 足助旅行（テレシネ）：合原氏、13分。

昭和54年のOMC撮影会作品。今年の撮影会候補地の一つとになりはしないかと持参された8ミリフィルム時代のテレシネ作品。今のデジタル作品の美しい画面を見た後では、何とも色の悪さが印象に残る。

8. 北海道撮影旅行Part3 冬・美瑛：合原氏、27分。撮影同行者などにあげるつもりでまとめた記録なので、行った順序通りに編集をせざるを得ないなど、記録としての話題と、作品としてどうこれらの素材を活かして短くまとめるかの話題提供枠。

以上で作品研究会を終了し、夜の部の例会に具え、腹ごしらえに地下街へ散会。

## 2月例会のレポート

昼間の作品研究会の集まりが少なかったため、例会の集まりも懸念されたが、いつもと同じく25名の参加をみてほっとした。今月の司会は有村氏、書記、関氏、デッキ係は増池氏と江村氏、受付兼照明係は渡辺氏の担当で会を進行した。今まで休んだことのなかった安居良枝さんが体調をくずして、検査入院のためお休みされたが、早く体調を整えられて、あのお元気なお顔とユニークな作品をお目にかかりたいものと念じたい。

■出席：有村、今井、江藤、江村、奥、上総、金子、河合、合原、関、中尾、那須、西村、華岡、藤原、前田、増池、松本、森、森下、森口、宮崎、安居、吉岡、渡辺の以上25氏。

■上映（今月の講評担当は関世話役）

1. 昆陽池にて

増池 茂さん 6分50秒

よく我々の素材の対象となる昆陽池だが、作品の序盤にもあったように最近では川鶉の飛来が異常に増えて中ノ島の樹木に立ち枯れが起きているような。

日頃はとかく構図にこだわる作者だが、今回はそんな計算づくのカットがほとんど見られないのはどうしたことか。組み立ても理路整然とは言い難く、折角のインサートカットは意味を成さずに孤立していた。よちよち歩きの幼児のあとに長い時間をかけた針葉樹のティルトアップはワケありかな、と思ったが前後に関連はない。つまり人物の扱いが中途半端なのだ。ゆりかもめのホバーリングから餌を投げるおぼちゃんの後ろ姿、しかし肝心のアップは省略されている。少女の手にしたパンに鳩が群がるシーンでラストはどうか盛り上がったが、ここは水鳥の池。その締め括りの主役が鳩とは意外だった。

## 2. 雪の山寺

河合源七郎さん 4分43秒

蔵王に向かう仙山線で途中下車したのだと言う。対象の寺は駅から5分ほどらしいが、次の列車が来るまでのわずかな合間を縫ってこれだけの撮影は普通ではできない。深い積雪のなか、見知らぬ土地に降り立って撮影を試みる旺盛な好奇心とその熱心さには驚かされた。静かにズームインすると舞い落ちる粉雪が岩肌をバックに散華の模様となって現われるシーンはこの作品のなかでも特に印象的だった。しかし作品として何とかまとまりを見せているが全体的には材料不足の感が強い。

## 3. 大和の秋彩

有村 博さん 5分58秒

実に美しい作品だ。足繁く奈良に通い続けて行き就いた作者の集大成とでも言うべきか。多武峰、飛鳥石舞台、そして東大寺に奈良公園と、深まりゆく日本の秋をもの見事に描いている。カメラの特性もあるだろうが、これほど色あざやかに秋を表現した作品はほかに例を見ない。ことに霧に包まれた奈良公園は息をのむような美しさだ。ひょっとして美術館には日本の風景画などはいらないのではないか…。もし海外旅行にこの作品を持って行って西洋人に見せたらどんな感嘆詞が飛び出すだろう。作品を見ながら、ふっとそんな突拍子もないことを考えていた。

あっちの例会では「長い」、こっちの例

会でも「もっと切れ」と、言われたそうだが、改めて見ると飛鳥の場面が極端に少ない。ここをもうすこし加えるか、それともいっそのこと切り捨てるかだ。

## 4. 嵯峨野今昔

安居利次さん 7分30秒

素材の元はOVCの撮影会だが、作者独特の感性でまったく別の作品に仕上げている。嵯峨野は平家物語など古典文学の中に悲劇の舞台として語られたところ。作者の発想もそこにあって、よくぞまあここまで調べたものと感心するほど詳しく述べられていた。が…、太秦など難解な呼び名のいわれや嵯峨野の歴史に登場する人物の名が多く出てくる。したがって話も複雑で歴史に興味のない俗人たちにはちょっと判りにくい。私には唐突としか思えないが、嵯峨野を語るのに映画村の立ち回りは必要だろうか。

休日は嵯峨野を訪れる若い女性が多い。怨念に満ちた昔を知ってかしらるか彼女たちは嬌声をあげながら嬉々として歩く。まるで繁華街の様相を呈した竹林のシーンに、古典のおどろおどろしい物語を被せてもどこかそぐわない気もするのだが。

## 5. 湖北の春はもうすぐ

森口吉正さん 6分48秒

昨年と同じ題名の作品があった。それに新しく撮ったものを部分的に入れ替えたそう。

まだ残雪がある琵琶湖畔の小さな河口で小鳥が水浴びをし湖面は白く霞がかかって、いかにも春近しをおもわせる。やわらかな陽射しのなかで釣り糸を垂れる人、水鳥にレンズを向けるカメラマン、陸では老人が一人、せっせと雪掻きのまっ最中。どれも断片的だが、それを絶妙の編集でカバーしているのはさすがだ。

## 6. 月読神社秋祭

江村一郎さん 6分

比較の対象に持ち出して申し訳ないが、11月の例会作品「単人舞」は踊りがメイン。しかし幼な顔が残る踊り手に勇壮感などみじんもなく学芸会の延長のような気がした。

同じテーマでもこちらは祭に集う人々と

夜店の情景が中心。祭り本来の単人舞は完全にカット、その前座の少女による神楽で締め括った。アップの効いた鋭いカメラワークで雰囲気盛り上げるお得意の手法。「よさこい」以後、見る者をぐいぐい画面にひきつけるテクニックを会得されたようだ。

## 7. あれから30年

前田茂夫さん 7分53秒

昭和47年(1972年)夏、まだ都電が走る東京・日本橋交差点に、8ミリカメラを手にした作者が立っていた。どこからともなく聞こえてくる名調子、それは新聞にも載ったことがある名物おまわりさんの交通整理をする声だ。世の中は高度成長期、交通量は年を追って増えていく。翌年作者がおなじ場所に立ったとき、名物おまわりさんは健在だったが都電は跡形もなく消えていた。

やや黄ばんだ当時のフィルム映像に白いイメージマスクをつけ、対比させる現在の画面には作者自身も出演、そのモンタージュが実に巧いと思う。角のデパートはなくなったが銀座通りはほぼ昔のまま。交差点に今日もおまわりさんはいるが普通に交通整理。変わったものと変わらないもの。「かつてこの付近で勤務していた頃と現在の自分が頭の中で走馬灯のようにまわっていた」ラストのノスタルジックな言葉が印象的だった。

## 8. 男と女

安居利次さん 3分30秒

韮公園の花と彫刻展から男女の彫像に絞って実験映像風に仕立てたもの。PCでエフェクトされた映像に、女、本能、肉欲、喝、などの文字が飛び出してくる。彫像を観て感じたものを映像にすればいいのだから、これはこれで作者独自の世界だ。しかし司会者はなぜか論評を私に指定した。「…エロスの宴」が似ているからだという。単にエロと言えど邦語で愛欲肉欲の表現を指す。エロチックとエロチズムは官能的の同義語だが、エロスはギリシャ神話に出てくる愛の女神の意味だ。グリヤピカソの難解な女体の絵画にもエロチズムはある。ましてや写実的な女体を彫る彫刻家がエロ

チズム表わそうと努力するのは当然で、それを素材にした「…エロスの宴」はたしかに「官能的」を意識した。しかしそこから肉欲の「エロ」を連想したというのなら私の表現方法が間違っていたのだ。

歴史物で独自の作風を築いている作者にある種の距離感があったが、この作品で何か親密感が湧いてきた。人間の「さが」を正面からとらえた勇氣に喝采を送りたい。

## 9. 浜の金盃は大忙し

松本 昭さん 4分40秒

イントロのガムランでバリ島と判った。地図の出し方に会場から異論があったが、これはなくてもかまわない。浜辺に女たちが集まり、舟から獲れたばかりの小魚を金盃に移す。ここでは金盃がトロ箱代わりだ。その横で魚を切りわけする女。小屋掛けの店には色鮮やかな魚が並んでいる。別のところでは金盃の魚を売る女も。天秤を担ぐのは男の仕事。すぐ目の前の海でアウトリガー付きの小舟が網を仕掛けている、等々。どうやら極めて狭い区域の中で、漁獲、水揚げ、仲買、小売、が同時進行で行なわれているらしい。豊かな南国の海ならではの光景だが、作品はそれらが無造作に出てくるので見る側は大変ややこしい。これを我々の常識的な流通の順序に並べ替えればもっと判りやすくなるのではないか。

「…大忙し」の題名で、金盃がトロ箱以外の役目も果たすのかなと思ったが違った。

## 10. 秋色立山

有村 博さん 8分28秒

前出と同一カメラか、これも赤の発色がたいへん綺麗な作品。しかし中間がやや単調で長く感じた。手持ちのせいかな unnecessary パンニングが気になる。最近は何の作品もタイトルの書体がおなじだが、内容によって変えてみてはいかがなものか。

### ■今月のインターネット作品

「浜の金盃は大忙し」松本 昭さん 5分58秒

### ■インターネット情報

今月も盛りだくさんです。インターネット版をご覧ください。